



「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいております大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

瀬戸神社 夫婦びやくしん

「江戸名所図会」には瀬戸神社の本殿横に、びやくしん（新編武蔵風土記稿）を始め、江戸期の地誌類では「びやくしん」を「混柏」と表記してをります。古い大木が倒れて安置され、「蛇混柏」と説明が付いてゐます。古くは瀬戸神社の境内には多数の混柏があり、太い古木もあつたようです。

伊豆の伊古奈比咩命神社（白濱神社）の境内にもビヤクシンの古木が繁茂してをり、大瀬崎の引手力命神社（大瀬神社）のビヤクシン樹林は国の天然記念物にもなつてゐます。

瀬戸神社にビヤクシンが多くあつたのも、三嶋の神を祀る共通点とともに、古代からの伊豆半島方面との交流（特に海上交通による）があつたと想定できます。

一方、鎌倉の建長寺や円覚寺にもビヤクシンの古木があります。開山蘭溪道隆が大陸から持参した苗を植ゑたのに始まると伝承されます。かうした鎌倉文化の影響から大切に保護されたのかもかもしれません。

境内西側階段の脇に、雄木と雌木の二本のビヤクシンがあります。これを夫婦ビヤクシンと名付けて注連縄で結びました。家内安全・夫婦円満のよすがともなれば幸いです。

平成二十九年祭事曆

- ◎ 一月 一日 歳旦祭
鶏鳴神事
- ◎ 三月二〇日 春季大祭
祈年祭・合祀神例祭
- ◎ 五月一日 例大祭
神社本廳献幣使参向
琵琶島弁天社へ神輿渡御
- ◎ 四月二九日 昭和祭
- ◎ 六月三〇日 大祓式
大祓人形納め・茅の輪神事
- ◎ 七月 九日 天王祭出御祭
本社神輿御霊入・宮出渡御
- ◎ 七月 一日 三つ目神楽
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 七月 一六日 天王祭巡幸祭
天王神輿町内巡幸
- ◎ 七月 二三日 手子神社例祭
- ◎ 九月 一日 浅間神社例祭
- ◎ 九月 一七日 熊野神社例祭
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 一〇月 一五日 手子神社秋祭
無形文化財湯立て神楽
- ◎ 一二月 二三日 秋季大祭
新嘗祭
- ◎ 二月 八日 歳の市
開運熊手授与
- ◎ 二月 二三日 天長祭
- ◎ 二月 三二日 大祓式
大祓人形納め・古札焼納式
- ◎ 毎月 一日 月次祭

金沢八景駅西口と歴史自然公園の整備計画

金沢東照宮と円通寺

左の写真は「東照宮」と書かれた掛け軸です。筆者は高橋泥舟です。泥舟は勝海舟・山岡鉄舟とともに「幕末の三舟」とも称される人物です。

この三人は幕臣として江戸幕府の滅亡と明治維新に際して、老中・年寄といふやうな高い身分ではありませんでした。薩長・朝廷方との折衝等に大きなはたらきをしました。それによりわが國を二分するやうな大きな内乱が避けられ、内乱に乗じて植民地化を図らうとする西欧列強の圧力をかはして近代化にすすむことができました。

そのはたらきの根底には、三人ともに武道の達人であり、その武道の基礎に「劍禅一如」といはれるやうな悟りといふか、

肝の据わった覚悟を体得した人物であったといはれます。

泥舟はもとは山岡家の出身で、槍の名手でありました。次男でしたので高橋家の養子となりましたが、兄が若くして無くなりました。その実家の山岡家を泥舟の妹の婿となつて継いだのが鉄舟でした。

大政奉還から江戸城開城して水戸に逼塞する徳川慶喜公に警護役として近侍したのが泥舟です。明治になり、幕臣の中にも榎本武揚のやうに明治政府に出仕するものもありました。泥舟にも優秀な人材として出仕の誘いはあったやうですが、「県知事程度では意味がない。太政大臣になつてくれといふなら請けぬでもない」と断つた逸話が残さ

れてみます。幕臣としての忠義を貫いたといへますが、心底に東照大権現への篤い信頼があつたといふことです。

その泥舟の筆になる「東照宮」の一行書ですが、これは故木村隆男氏の所蔵になつたものです。

木村家は、地元の皆さんは金沢八景駅の西側に藁葺き屋根の由縁のありさうな建物があつたのをご承知でせうが、この建物の御当主でした。



そしてこの建物は木村家住宅主屋（旧円通寺客殿）として平成七年に横浜市認定歴史建造物に指定されてみました。

明治維新までは、円通寺といふお寺であり、その客殿がこの建物でした。しかし円通寺といつても普通のお寺のやうに檀家を持つお寺ではありません。東照宮を管理することを基本的な務めとするお寺だったので。

徳川家康は慶長五年、関ヶ原の合戦の直前に大阪から江戸へ戻り、さらに会津へ進発するといふ途中（小山まで行つたときに三成の挙兵を知り、関ヶ原へ向かひます）に、鎌倉から金沢八景の地を訪れています。そこで金沢の風光が大層お気に召したのでさうです。ですから江戸城御殿の將軍の御座所の襖絵には、特に金沢の風景を選んで狩野派絵師に描かせました。

風光も勿論ですが、江戸と結ぶ海上交通の拠点としての軍事・経済的な重要性も考慮したに違ひありません。

のちに、秀忠に將軍職を譲り駿府に隠居して大御所様となつてからも、江戸へ赴く時には金沢に寄つて、権現山（円通寺客殿の後背の山を権現山といひます）から八景の景観を愛でたのださうです。



秀忠は、家康が八景をながめるための御殿をここに作らうと考へましたが、未着工のうちにか家康が亡くなりました。

家康の遺言により久能山、さらに日光に墓所を設け、東照大権現としてお祀りをするのです。家康公の八景御殿の予定地にも小さいながら東照宮を造営



し、その管理のために、円通寺といふ寺院を設けてその祭祀にあたらせたのです。

明治維新後の神仏分離により、円通寺は廃寺となり、東照宮は瀬戸神社に合祀されました。

代々、円通寺の住職であった家柄を継承した木村隆男氏は、住居の別棟に小さな御神座を設け、この「東照宮」の掛け軸を掛けて、桜の季節になると、この円通寺の史跡を守る会の人々とともに東照宮祭を毎年営むことを例とされてきました。

横浜市は金沢八景駅周辺の区画整理に併せ、この地域を木村家から買い取り、公園として整備する計画を進行中です。

公園の名称は「(仮称)金沢八景西公園」として、円通寺客殿は解体整備して再建保存されることとなっております。

この事業をより意味の深いものとするためには、徳川家康ゆかりの公園であることをもつと明瞭にして、郷土の歴史的文化的意義づけを考慮すべきです。

公園の名称も家康や東照宮の縁故のことが判るやうなものにすべきです。公園のなかの、古くは東照宮があった場所には、家康公の記念物を安置して、そこに由緒を明記した説明板をしっかりと設置したいものです。

皆様からも、市当局へ広く要望していただきたく存じます。

朝比奈町鎮座

熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものとひます。仁治二年(一二四二)、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたこととせう。

その後、元禄八年(一六九五)、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を集めて、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成し、さらに平成御大典記念事業として新たな拜殿を建築竣功して今日に至つてひます。

御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。

例祭日は九月十七日で、昔ながらの古式にのつとつた湯立神楽が今も続けられてひます。

谷津町鎮座

浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に來遊し、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目の下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の來訪は史実ではありません。創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まった中で当地にも勧請されたものでせう。

ご祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かつたと伝へます。御祭神が天孫瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。

祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭(近くの土日曜)には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他のにぎやかな行事が営まれます。寛正四年(二四六三)西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりには崇敬者婦人が分けあつたとひふこととす。

瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起原で、今から千五百年以上も前(古墳時代)のことです。

治承四年(一一八〇)鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの靈域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にまで信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教法人となり神奈川県神社廳勅使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年の屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修営事業が行はれました。

御祭神

大山祇(おほやまつみ)の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。
須佐之男(すさのを)の命

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追ひ祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれています。七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらつしやいます。

釜利谷町鎮座

手子神社

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとの地の領主伊丹左京亮が、文明五年(一四七三)瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年(一六八〇)、伊丹氏の子孫三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智業院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。

明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加へました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日(現在はその後の日曜日)ですが、十月十五日(前後の日曜日)の秋祭りには、古式豊かな湯立神楽が昔ながらの伝統を守つて行はれます。

境内の洞窟にお祀する竹生鳥弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあつたもので、厄除け、開運の福神として信仰されています。

「ついたち御幣」について

毎月一日(正月のみ三日)の午前八時三〇分より、月次祭(つきなみさい)を齋行してをります。祭典終了後、毎回、宮司の神道講話があります。

月次祭の参列者には「ついたち御幣」をお持ち帰りいただきます。これは毎月色変はりの小さな御幣で、ご家庭の神棚に立ててお祀りいただき、月ごとの家内安全をお祈りいただきます。(参列できなくとも授与所でお受け下さい。)

講話の内容の要約は、毎月「月次の葉」に印刷して、お頒ちいたしてをります。拝殿前の竹筒に入れてありますのでお持ち帰りご覧いただけます。

月次祭はどなたも参列できます。時刻までに御昇殿下さい。



瀬戸神社

〒三三六-1-0027
横浜市金沢区瀬戸十八-14

(電話) 〇四五-一七〇-1199
(FAX) 〇四五-一七〇-1199

http://www.setojinja.or.jp